



一宮町長  
馬淵 昌也

先日、いすみ市の太田市長さんから「著書を頂きました。その中に「歩く旅」に関する一文がありました。北海道の中標津から摩周湖を経て弟子屈まで、全長70キロもの長大な歩くコースが設定されており、大変人気があるというお話です。

拝読して、「わが意を得たり」という思いでした。実は長らく、歩く旅の楽しさについて、もっと人びとが認識して、歩く旅のためのルートが整備されるべきではないか、と思ってきましたからです。

かつて私が育った戸塚は東海道の宿場町でした。両親の故郷は、同じく東海道の宿場で城下町である浜松近郊でした。そこで小さい頃から街道文化というものに興味を持ちました。そして、有名な弥次さん北さんの『膝栗毛』ではないですが、日本には、他国に類をみない、街道を旅する楽しさを主題にした文学が発達してきたことに気付きました。旅行記は勿論多くの国に見られますが、多くの人がそこをたどり直して追体験するお手本という形での街道文学は、日本独特であると思います。日本人は、自分で歩く旅の面白さを古くから意識してきた国民であると思います。こうした伝統は、清水の次郎長

や水戸黄門などの旅を主題とする映画やテレビを経て、現代のシニア層に受け継がれています。実際に東海道の面影は薄れてしまった今でも、「東海道を歩こう」といった類の本は陸続と出版されています。

しかし、一方では、鉄道、そして自家用車の発達によって、歩くための道はほとんど消滅して、特に自動車に乗っ取られてしまいました。日本ではどの道でも歩行者は肩身の狭い思いをしなければなりません。私は、これは大変残念なことだと思っています。歩く旅の楽しさを広く深く知っている日本人であればこそ、歩く旅のためのルート整備を、飲食や宿泊の面も含めてもっとすべきです。そうすれば、そこには必ず歩こうという人が現れ、消費が生まれます。

今後、一宮町の中でも、また周辺市町村との間でも、歩いて周遊するルートの設定と整備をもっと強めてゆければと思います。都会からの、「歩きたい」シニア層をお迎えすることができれば、楽しんで歩き、喜んで消費して頂けること、間違いないと思います。一宮町から、歩く旅の文化の再生の一步を記せば、大変嬉しく思います。